

駒場の教室における

阿部良雄の風貌

稲賀繁美

私的追想——「美術史家、美術評論家としての阿部良雄」を論ずるための序

駒場の東京大学教養学部教養学科で初めて阿部良雄の授業に出たのは、一九七六年の秋学期、あるいは七七年の春学期だったろうか。もつか旅先のため遺憾ながら確認不可能なのだが、授業概要には、ヴィオレ・ル・デュックのゴシック建築論を読むという主旨が見えた。十九世紀フランスを代表するこの中世建築修復理論家の建築事典の抜粋とともに、そのポケット版抜粋に序文を寄せたユベール・ダミッシューのテキストの解説が、学生に割り当てられた。辞書項目は、専門課程進学予定者あるいは進学したての三年生、そして長文・難解をもつてなるダミッシューの序文は、上級学部生の受け持ちだった。といっても田舎出身の無知蒙昧なる学生には、そもそもヴィオレ・ル・デュックなどという名前も初耳なら、ダミッシューという人物が誰なのかも、皆目見当がつかなか

った。最初の半年は、ほぼ何も分からぬままに、何かを発言すること、阿部良雄の口から「いいですか」という文句が発せられたことのみを記憶する。「いいですか」が「馬鹿なことを言うのは止めてください」という意味の嗜め、訂正の合言葉であることに気付いたのも、一年以上を経過してからのことではなかったかと、改めて想起される。

当時四十代半ばの阿部良雄の授業は、フランス語をようやく身につけ始めてわずか一、二年に過ぎない学生の水準などお構いなしという風情、聴講者の理解などまったく及びも付かない高水準で展開されていた。発表を当てられた学生の解釈が終わるや、間髪をいれず「いいですか」が入り、学生側がなんとか一週間かけて苦心惨憺準備した解説には、全否定に等しい訂正が加えられる。

だが、その内容はほとんど通常の日常言語における日本語とは思えず、学生たちの理解の域を超えていた。語源に無頓着に、通りのよい日本語に頼って意識しようとする、すぐさま指摘され、おもむろに、個々の単語がフランス語の宇宙のなかで持っている意味連関や歴史の重層が解き明かされ、それにもとづいて厳密な訳語を忠実に当てるのが奨励される。また解釈にあたつては論理的な可能性をすべて吟味したうえで、妥当な理解へと向かう周到さが、要求された。当時そうした手続きの意味を理解できたとは、到底思えないが、それでも半年ほど我慢して聴いていると、臆^{おそ}げながら、授業の意図が仄見える。構造主義美術史の領袖、ユベール・ダムシシュは、ヴィオレ・ル・デュックの建築理論にみえるゴシック建築の構造分析に、機械論的ではないが、構造論的な力学的合理性を見出して、その復権を狙っていること。そしてそれが、ダムシシュ自身にとつての、実証主義に対する叛旗の表明でもあったこと。そこには、修復をめぐる政治学と歴史観の闘争が埋め込まれていたことも。

*

当時の駒場キャンパスは、今から思えば、そのひとつの絶頂期を迎えようとしていた。外国語科の教師たちは、ときに本郷の教授たちから、しよせん語学教師に過ぎないといった蔑^{あざ}みの眼を向けられていた。だが、そこに当時の日本の人文学を代表する論客たちが犇^{しめ}いていたことは、疑えまい。駒場には本郷の教室制度の枠

組みとは無縁の、自由闊達な雰囲気があり、大講座制のお陰で広範な教師に接する機会が保障されていた。筆者の狭い見聞に限つても、学部や学年を問わぬ自由選択科目の全学教育一般ゼミナールなる枠組みでは、おりから、芳賀徹が平賀源内、平川祐弘が小泉八雲など、その後主著の一角をなすこととなる研究の萌芽を、学生たちとの議論を通じて、闊達に展開していた。

さらに教養学科に進学してみると、おりから副専攻という制度が整備され、少人数のゼミナール形式で、贅沢このうえない討論に参加することができた。芸術論という副専攻を選択してみれば、『ノンセンス大全』刊行まもない高橋康也のシェイクスピア論、『椿説浪漫主義文学談義』が話題を呼んだばかりの由良君美の構造主義造形芸術解剖といった授業が、九十分単位の高密度で、惜しげもなく提供されていた。これに本郷からも高階秀爾が週一度、芸術史の授業のために古巣に来るのを愉しみにして、その気さくにしてスマートな頭脳が、相変わらず学生たちを魅了していた。フランス畑に目を向ければ、膨大なる博士論文『ポール・クロードル——詩的想像力の世界』を書き上げた渡邊守章は、『ラシーヌ全集』個人訳に乗り出そうとしていたし、蓮實重彦も『反Ⅱ日本語論』『批評あるいは仮死の祭典』など、難解なる文章からじよじよに脱却する兆しを見せつつ、週に最低十本の映画を見ている学生でなければ門前払いと噂された、ひどく高踏的な映画論のゼミを主催して、事情通たちの人気を博するに至っていた。おりから同じキャンパスの一角では、マルセル・デュシャンの《大ガラス》駒場ヴァージョンの作成が進み始め、図学の横山

正は、箱蒐集や透視図法研究に没頭する暇もあればこそ、奇特な出資者への挨拶に駆けずりまわり、駒場の時計台の屋上に設けられた作業用の仮小屋では、まだ当時大学院生だった小林康夫や岩佐鉄男が、製作算段に余念ない日々を送っていた。

こうした知的環境が、哲学的な思考訓練とも密接に連動していたことは、伏線としてここに一言記しておくべきだろう。駒場には、国際関係論、比較文学比較文化と並んで、科学史・科学哲学の大学院が置かれていたが、その活況ぶりも尋常一様ではなかった。

今となつては空想するのも困難だが、『新視覚新論』などを展開していた分析哲学の大森荘蔵が、物象化論に関する旺盛な執筆でカリスマ的な影響力を行使していたマルクス主義哲学者の広松渉などと組み、週末午後には合同でシンポジアを開いており、そこには本郷からも黒田亘らが論戦を挑みに参加して、和気藹々たるなかにも真摯な知的討論の雰囲気醸成していた。科学史の領域でも、伊東俊太郎が壮大な人類史的視野で精神革命を説く傍ら、科学的進歩に対する村上陽一郎の犀利な批判的啓蒙が、常識に捕われがちな学生の頭脳を柔軟に解きほぐすために、比類なき教育的効果を齎^{もたら}していた。

阿部良雄がこれら同僚たちの仕事を貪欲に咀嚼していた様は『西欧との対話』（一九七二）にも明らかだ。また論敵への容赦なき舌鋒は、『ひとでなしの詩学』（一九八二）の注にみえる萩原朔太郎『氷島』の解釈をめぐる、平川祐弘との論争（一九七七）などにも、その片鱗が披瀝されている。

*

そうした精神的高揚の中、阿部良雄は一九七五年に『群集のなかの芸術家——ボードレーと十九世紀フランス絵画』を上梓していた。「悪戦苦闘」から生み出された、と本人もあとがきで回顧する、鏖^{もく}の推敵を経たその高密度の文章は、出版後三十年を超えても後進による凌駕を許さず、この話題に関する限り、思考の限界に肉薄するだけの、奇跡的な達成を見せている。行文中に縦横に張り巡らされた伏線は、あまりに錯綜しているため、初学者にはいささかならず取っ付きにくい印象を与える恨みがある。とはいえ、読者の側でも何がしか研練を積み、その後に再びこのテクストに戻ってみると、その度に、どうしてこまでの読みが可能だったのかと嗟嘆するほかない論点が、おそろしく常軌を逸した圧縮度のなかに凝結していることに、繰り返し驚かされることとなる。

ほんの一例を挙げるにとどめるが、第四章「現在」の発見」の冒頭には、オースマン男爵によるパリ改造計画によって出現した目抜き通り（ブルバール）が取り上げられる。詩人のボードレーは散文詩「貧しい者たちの目」で、そこに「未完成の華やかさ」をいちちやく誇示する都市の表情を読み取った。ここにさりげなく提示された「未完成の華やかさ」こそ、ボードレーが将来を託したエドゥアル・マネの、新奇なる美学の眼目であり、都市空間の変貌が、その寓意をなしている。そこに本章の通奏低音が

提示され、中公文庫版の表紙に採られたマネの《チュイルリーの音楽会》が、その最良の具現となる。

ここに摘出された瞬時性の問題は、後年小林秀雄を論ずるに際して独自の展開を見せることになるのだが、未完成の都市計画と新たな美学との構造的共鳴は、追ってT・J・クラークが八〇年代に展開して、やがて『現代生活の画家』に集約することとなる問題意識の先取り、と見てもよいだろう。先ほど「寓意」という表現を用いてみたが、それもまたヴァルター・ベンヤミンのبارリ論が広く認知され、ポール・ド・マンの修辭が流行を見ることで、初めて市民権を再獲得する認識装置。まだその語彙こそ見出せないが、この段階で阿部良雄は、早くも「寓意」の問題系を浮上させるべく腐心していたことが、今日になってようやく納得させられる。そしてこのような驚嘆すべき先見の明が、見る眼のあるほどの読者には、毎頁のように出現し、ほとんど眩暈を覚えさせる。

*

中期のこの主著執筆を背景に、七〇年代後半の授業における阿部は、一方ではボードレール美術批評の緻密な解析を心がける。これはライフワークとなる『ボードレール全集』個人訳という偉業への前哨をなす。とともに、この時期の阿部良雄は、他方ではまだ当時日本では無名に等しかった社会学者、ピエール・ブルデューの初期論文を授業に持ち込んで、学生の読解力向上に資することを試みていた。教養学科での授業は、土曜日の二コマ目で、当

時第八本館と呼ばれた建物の四階東隅のセミナー教室において、昼前までの時間帯だった。いつのころからか、これには芸術社会学との名称が授けられていたが、その背景には、阿部良雄が二度に渡る留学時代に私淑したピエール・フランカステルの芸術社会学の構想があった。ルネサンスにおける透視図法の誕生から、印象派以降におけるその破壊、さらには立体派以降における再生という物語を描きあげた『絵画と社会』（一九五二）は、五〇年代末の阿部第一回目の留学時以来の愛読書であり、また生前最後の小ぶりな著作『芸術社会学研究』（一九七〇）に集約されるフランカステルの方法論は、阿部自身の著作『西欧との対話』（一九七二）に、的確にして高密度の要約が提供されている。

ここでもひとつの示唆のみにとどめるが、フランカステルは、ある特定の時代と社会環境は、そこに客観的に存在した幾多の形象的思考 *pensée figurative* の可能性のなから、ある特定の可能性のみを芽生えさせる、と述べている。それは、事後的に回顧する時には、ひとつの合理的な系列 *serie* をなすものとして把握される軌跡を描いているが、その原初の発端 *prototype* の内に、彼は理性の巧緻を探っていたようだ。この見地からすれば、例えばブルデュールの唱える「場」*champs* の概念が、フランカステルの「環境」*milieu* との対決から精緻化された概念である可能性も、再検討に値するだろう。また、ダミッシュが透視図法を論ずるに際してこたわった数学的な無限小の問題が、プロトタイプを巡るフランカステルの問題系の、密かなる換骨奪胎だったこともみえてくる筈だ。なぜなら、フランカステル同様、ダミッシュの場合にも、共

通の問題——はたして無限小の発端のうちに将来の方向が既に胚胎しているのかどうか——が問われていたのだから。

小ぶりながら賢明にして重宝な教科書『芸術社会学』（二〇〇一）を著したナタリー・エニツクは、フランカステルの芸術社会学の構想はもはや決定的に乗り越えられたと断ずる。だが、それはブルデューを批判しつつもその延長上に立つ、ひとつの系列的、診断に他なるまい。「時代遅れ」の烙印を押すことよりも、むしろ大切なのは、方法論的形象化、思想のプロトタイプ産出にあたっていかなる取捨選択がなされたのかの解明だろう。パノフスキーの図像学が、形象的可能性の取捨選択に関する考察を疎かにして、実際に残された歴史上の系譜の文献学的再構成に満足している点を批判したフランカステルと、そのパノフスキーの提起したスコラ学とゴシック建築との構造論的相補性を創造的に読解することから「Hains」の概念を彫琢したブルデュー（これについては近年スコラ学の立場から根底的批判がある）、さらに、フランカステルのパノフスキー批判をいわばフランカステルに逆照射して、フランカステルの『絵画と社会』の物語構造における起源（すなわち補遺で申し訳のように言及されるパノフスキーの業績）の隠蔽と、適及的合理化（すなわち「透視図法の誕生」という単一起源神話）とを指弾したダミッシュと（そこには、見方によっては、あまりにフロイト主義的な精神分析の臭いが強く立ち込めている）。この三つ巴のような相克に、思想の懐胎におけるプロトタイプ生成の状況を見定める努力、そして学識整理よりも、「我発見^レセリ^リ」の力動学を解明することが、思想史の課題だろう。

そこまで踏まえて、改めて阿部良雄が、宮川淳への書簡の体裁をとって書いた、フランカステル論に立ち返ってみよう（『美について何を語ることができるか』『西欧との対話』）。ここで阿部良雄は、発端の偶然性という問題を、ジャック・モノーの『偶然と必然』に重ね合わせている。一見芸術論とは無縁の議論を展開しながら、阿部良雄が、現代造形思想への参与を通じて、西欧精神思想の中枢に斬り込んでいる様が、あらためて実感されよう。さらにそこに木村資生の中立進化説を重ねあわすならば、西欧の理性にむけて「日本」から打ち込まれた「矢」が、何を射抜こうとしていたかも見えてくる。はたしてそこには分子生物学を専攻した夫人、与謝野文子の感化もあったのだろうか。

*

ダミッシュの後年の主著『透視図法の誕生』（一九八七）が、愛憎半ばする師匠、フランカステルに対する尋常ならざる敵愾心を秘めた著作であることを、阿部良雄は知悉していた。そのダミッシュに注目する阿部の選択も、安易な流行追従などとは水準をまったく異にする。パリ知識人界の表裏に通じた、元高等師範学校特待留学生ならではの周到なる目配りは侮れない。その鍵は初期の傑作『若いヨーロッパ』（一九六二）を熟読吟味すれば、おのずと悟られる。と同時に『西欧との対話』の問題の章で、早くもブルデュー初期の論文への言及が見られるあたりには、阿部良雄の軒並み外れた勤勉さ、着眼の鋭さと先見の明、さらにブルデュー

ーへの戦友意識を見ることが許されよう。芸術における規範の成立とその背景をなす権力構造に関する初期ブルデューの粘着的な思索は、やがてカントの『判断力批判』を社会学的に論破しようとする野心的な著作『ディスタンクシオン——社会的趣味判断批判』（一九七九）として公刊され、話題を^{あき}あき。この錯綜した大著刊行直後、まだ日本語への翻訳などメドもつかない段階で、阿部良雄は早くも本書を読むことの「愉悦」と「悲惨」を見切り、『現代思想』誌に、時期尚早を承知のうえで、透徹した書評を掲載した。そこには、芸術的価値判断にからまる制度論的批判の社会学の必要が説かれており、相前後して出版された、宮川淳との共著『美術史とその言説』で明確にされる、歴史社会学派としての阿部良雄の、鮮明な姿勢を際立たせている。そのブルデューが自らの芸術社会学を『芸術の規則』に纏め、規則からの逸脱を規則とする遊戯の仕組みを分析するのは、遙か後年の一九九二年のこととなる。

*

授業での阿部良雄は、その細身だが大柄で、意外なほど骨太な全身に、張り詰めた緊張感を漲らせていた。眠り狂四郎と紳名されたとも耳にしたが、その授業での言語は、しかし一見したところ、およそ快刀乱麻を断つ類の明晰さとは正反対に見えた。峻厳なる方法論は、学生に対して向けられるだけではなく、自らの探索にも容赦なく適用され、風通しのよい見取り図など、自ら破壊し

てしまう凶暴なる自虐性を発揮した。その結果、口にする言葉は、発声された瞬間には訂正の対象となつて打ち消され、死屍累々の様を呈する。もとより当時はこれがボードレールのサディズムの実践などとは、思いも至らなかった。詩作の際の語彙の模索にも似て、あのノソノという触手が行く手を塞ぐ行文の合間に、難解な単語が複雑な構文に絡まって出現する。もちろんそれが、尋常一様ならざる学識の積み重ねと、徹底した思索の到達点であることは分かるのだが、容易にノートを取ることを許さない。一度など、色彩論に関する古今東西の学説を総動員して、ボードレールのドラクロワ論を読み解こうとする仔細な分析が、授業中に突然始まった。数分で出口が見えるものと思つて気楽にノートをとり始めたものの、先生の難航苦行はどこまで行つても終わりが見えず、受講生一堂、呆然として手を止め、文字通りの「馬耳東風」を体験したこともあった。思うにこのスタイルは、ボードレール学者として阿部が師事した、コレージュ・ド・フランス教授、ジョルジュ・ブランを、反面教師としながらも多分に意識したものであったようだ。そのことに漸く合点が行ったのも、阿部良雄本人からの要請を受けて、パリでブランの名（？）講義に出席して後のことである。

こうした阿部良雄の言語は、立て板に水の見事な話術で、フランス人インテリの聴衆を^{てきめん}観面に湧かせる渡邊守章の演劇的な丁々発止とも、また正確無比で完璧、そのまま文章になりそうなのだが、何を言っているやら皆目見当もつかない蓮實重彦の重厚なる文語体とも異質な、類例を見ぬ詩的言語体験の極北、といつてもよか

った。阿部自ら、渡邊の「垂れ流し」を阿部自身の「糞詰まり」と対比させ、渡邊の面前で揶揄してみせたのを、今も鮮明に覚えているが、そうした辛辣な皮肉や巧まざるユーモアが、一見生真面目な行間や会話の端々に、「阿部良雄用語」として、ふと悪戯っぽく差し挟まれる。

*

聊か私事に渉る。後年、一九八八年のことだが、フランス留学から戻って、短期間、駒場の助手を拝命した時期がある。「ボードレール全集」個人訳の大業を終えた阿部良雄は、紺色縦縞の英国風スーツに立派なネクタイ姿と、自分では忌み嫌っていた筈の「ブルジョワ的」身じまいに徹して、謹厳このうえない佇まいを見せていた。授業には関連図書を紫色の風呂敷に包んでくる。洋装と和製簡易袍の珍妙な取り合わせを楽しんでいる風情もあった。この年の授業で阿部は、T・J・クラークの近著『現代生活の画家』（二九八五）を組上に載せて料理してやろうと身構えていた。最初の授業が始まるや、阿部はクラークの著書冒頭の序文に対して、犀利な分析の缺を加えて、序文の目論みを見事に武装解除してしまった。もはや真面目とも冗談ともつかぬ阿部の舌鋒は冴え渡り、マルクス主義者クラークの拘りを見事に摘出しては、チクリと警句を効かす。その透徹した弁舌には、授業に出席していて、抱腹絶倒に耐えかねた経験がある。この論評をテープ録音から起こして提供すれば、最良のT・J・C入門になっただろう。かつての「五

月革命」期の同志、クラーク本人に伝えてやったら、さぞや愉快だったろうにと、今に至るまで悔やまれてならない。

とはいえ、どうやらその場で教師の辛辣極まりない冗談を理解できたのは、授業に無断闖入した迷惑助手一人だけだったらしい。受講者は、専門課程に進学したばかりで、美術史研究の最前線などにはまだ皆目通じてもない学部学生諸君である。三十年以上にわたる研鑽に支えられた阿部良雄の「根柢ある深読み」をいきなり聞かされても、まるで狐に摘まれたような有様だったに違いない。否、それ以前に、教科書に指定されたクラークの英語が、受験英語しか知らない当今の学生には、とても歯の立つような代物ではなかった。英語なら読めるだろうと思っていたのに、受講する東大生の英語力の未熟さに啞然として「いいですか」を繰り返す阿部良雄。その姿に、十数年まえの自らの学生時代が重ね写しになった。研練のもたらず見識が人を孤独にする。その究極の事例に接して、思わず嘆息が漏れた記憶がある。加えて、極端なまでに謙虚なお師匠様からは、次回以降キミは授業への出席は遠慮してくれ給え、とやんわり禁令を申し渡される羽目となった。

*

こと学問に関しては、熾烈なまでに容赦ということ知らなかったこの謹厳居士が、家庭に戻り、少量のアルコールを聞こし召すと、まことに寛容にして「愛嬌」のある人物へと変身を遂げたことは、知る人ぞ知るところだろう。自分の学問上の恩師に対して

「愛嬌」などとは、いかにも適わない表現かもしれないが、これより相応しい語彙に思い当たらない。家庭人としての阿部良雄の風貌。その温容に触れる機会の得られたことを、我が人生の幸福として心に刻みつつ、この場の責めを仮初に塞ぐこととしたい。

(ワシントンDCにて。二〇〇七年五月末日) ㊟

〔追記〕

文中、敬称はすべて省略させて戴いた。多々失礼にわたる段、お詫び申し上げる。また現在外国滞在のため、原資料を参照できなかった。出典などは、機会を見て補いたい。仏文による多くの画期的な論考を含め、単行本未収録の阿部良雄の幾多の文章群が早晩に著作集に纏められることを切に祈る。拙文がそのための誘い水となるならば、本望である。編集部からの要請とは裏腹に、やや私的、低徊かつ周辺のな事情に終始した。併せて寛恕を願う。

水声通信

既刊号内容

① 荒川修作の《死に抗う建築》

論考☆荒川修作 瀬戸内寂聴 馬場駿吉 塚原史 河本英夫 高橋順一 小野暁彦 佐野吉彦 永野宏志 他 特別寄稿☆清水徹 連載☆小林康夫 松浦寿夫 高橋透 桑野隆 野村喜和夫 中村邦生

② 小島信夫を再読する

論考☆小島信夫 大庭みな子 三浦清宏 堀江敏幸 千石英世 中村邦生 飯島耕一 芳川泰久 阿部公彦 斎藤環 茂木健一郎 他

③ 村山知義とマヴォイストたち

論考☆五十殿利治 水沢勉 松浦寿夫 白川昌生 滝沢恭司 林淑美 波瀾剛 G・ワイゼンフェルド 他 特別掲載☆J・J・ルセルクル

④ ロシア・アヴァンギャルド芸術

論考☆タチャナ・コトヴィチ 桑野隆 浦雅春 戸田ツトム 武隈喜一 大島幹雄 江藤光紀 井上徹 江村公ハン Ⅱ マグメドフ 他

⑤ 野村喜和夫 詩の未来に賭ける

論考☆野村喜和夫 中沢けい 藤沢周 小林康夫 新井豊美 鈴村和成 石田尚志 森川雅美 山内功一郎 M・パーマー 他

⑥ ジョルジュ・ペレック

短篇☆G・ペレック 論考☆酒詰治男 松島征 塩塚秀一郎 宮川明子 若島正 湯沢英彦 春日武彦 M・F・フェリエ 他

定価 一〇〇〇円＋税

水声通信

no. 18

2007年6月号

[特集] 阿部良雄の仕事

発行 2007年6月15日

定価 1500円+税

編集発行人 鈴木宏

発行所 株式会社水声社

東京都文京区小石川 2-10-1 いろは館 〒112-0002

電話 03-3818-6040 FAX 03-3818-2437

郵便振替 00180-4-654100

<http://www.suiseisha.net>

デザイン 宗利淳一

用紙 岡田紙店

印刷製本 デイグ

ISBN978-4-89176-633-7

乱丁落丁本はお取替え致します。